



あかちゃんからお年寄りまで居心地の良い図書館をめざして ～熊取町立熊取図書館の活動紹介～

渡辺 直子

I. はじめに

緑の木立を通り抜け、四季折々に花咲く道を辿っていくと、落ち着いた風合いに退色した煉瓦の壁が見えてくる。ガラス越しに色とりどりの絵本の表紙を見ながら館内に入ると、吹き抜けの高い天井が大きく広がり、開放感あふれる閲覧室ではゆったりと寛ぐことができる。

(図1)



図1

この建物を設計した鬼頭梓氏は、「建築は完成したときから古くなる一方です。だから、常に未来を生きる建築を作っています¹⁾」と語っている。開館後15年を経た現在、図書館は、多くの方が訪れる日常的で身近な施設となった。これまで児童サービスをはじめとして、さまざまなサービスを行ってきた熊取図書館の取り組みの一端を紹介したい。

II. 熊取町・熊取図書館概要

熊取町は大阪府南部、関西国際空港の近くに位置し、4つの教育研究機関がある面積約17

km²、人口約4万4千人の大都市近郊住宅、学園都市である。住民アンケートで町内にほしい施設の1位になったことから図書館づくりが始まり、1994年に開館した。延床面積約4km²、蔵書冊数約35万冊、年間貸出点数約50万点と、町としては比較的大きな図書館であり、現在職員16人（うち正職員8人）が運営にあっている。

III. 児童サービス

熊取町では、開館以来、積極的に子どもの読書活動の推進に取り組んできた。児童書は約11万冊所蔵している。児童室には約2万冊の本を開架し、たくさんの中から自分たちの興味・関心に合わせて選ぶことができるように、年齢に応じて本の並べ方や展示を工夫している。行事についても、「おはなし会」や幼児対象の「こぐまタイム」など子どもが本に親しめるような機会を継続してつくってきた。

また、2004（平成16）年度に「熊取町子ども読書活動推進計画」を策定し、熊取町に住むすべての子どもが、いつでもどこでも本に親しむことができるように、住民団体・関係機関と連携しながら、子どもの身近に本がある環境づくりを進めている。

1. 児童書の選書と配架（図2）

選書については、選書担当者が見計らい用に送られてくるすべての新刊書を手分けして読み、感覚だけで選ぶことのないように書評カードに記入したうえで、月1回の選書会議で購入を決定している。毎月5冊以上の児童書を読み込む必要があり、また1冊の本を評価する言葉を選

わたなべ なおこ：熊取町立熊取図書館

ぶのに悩むことも多く、正直頭を抱えるときもある。ただ、私自身を含め、熊取町では、司書として採用されてから、児童サービスの研修に参加する機会を多く与えられてきた。児童文学で古典といわれるものを数多く読んできたことが、それぞれの司書の中に、選書の基準を形成しているように思う。



図2

その一方で、「おはなし会」などの行事や日常のやり取りを通して、子どもたちの反応から学ぶことも多い。絵本を読んでいると、大人が見落としてしまうような、本文には関係のない小さな虫を探し出して、子どもたちは楽しんでいる。子どもの本の楽しみ方や価値を知っているのは子どもなのだから、その子どもたちの「いま」を見て、年齢や発達に合った本を選ぶことも司書として大切なことである。熊取図書館の児童書の選書は、時間のかかるやり方ではあるが、1冊1冊に目を通すことで、私たち司書が子どもたちに自信を持って本を薦めることができるのだと感じている。

冊数については、子どもは大人よりも目の前に実際にその本がなければ興味が薄れてしまいやすいことを考え、できるだけ複本を揃えたいと考えている。

配架については、子どもが自分に合った本を実際に手に取って選びやすいように、子どもの目線も考えながら並べている。絵本は、基本的には画家の名前順に並べているが、幼児向けの

棚を作り、乗り物や動物、食べ物など、幼い子どもたちの興味・関心に合わせた配架を工夫している。読み物は、低学年向きと中～高学年向きに分け、書架の上段と下段に配架しているが、「怖い本」や「探偵の本」など人気のあるテーマで並べたコーナーもある。いずれも、表紙を見せる展示方法を取り入れ、子どもが手に取りたいくなるような書架を目指している。

2. 子どもと本をつなぐ取り組み

(1) おはなし会

①こぐまタイム(対象:2歳から5歳の子どもと保護者)毎週実施(図3)

②おはなし会(対象:5歳から)月2回実施

「こぐまタイム」は、くまのパペットを手にはめて、参加した子どもたち一人ひとりへの歌の挨拶からはじまる。絵本数冊と手遊びなどを行う30分程の行事だが、子どもたちは毎週楽しみに参加している。「おはなし会」は、ストーリーテリングを中心に絵本の読み聞かせなどを行っており、開館以来継続して実施している。

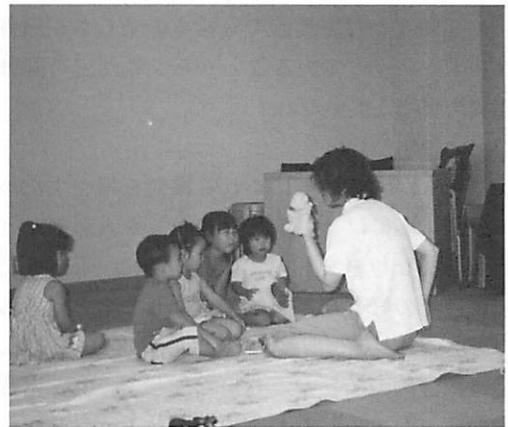


図3

地道な取り組みではあるが、司書として薦めたい本を直接紹介することができ、子どものさまざまな反応に触れ、映像ではなく言葉だけで物語の世界を想像する体験を提供できる貴重な機会である。また、はじめは親の陰に隠れていた子どもも、会の終わりには自ら寄ってきて話しかけてきたり、笑顔を見せてくれたりするよう

になり、子どもたちとの信頼関係を築く場にもなっている。

(2) ブックスタート

2002(平成14)年から、健診の担当課である健康課と住民ボランティアとともに、乳幼児4カ月健診時にブックスタートを実施している。健診の待ち時間を利用して、司書と住民ボランティアが絵本を通しての親子のふれあいの大切さを伝えながら、絵本1冊を手渡す取り組みだが、熊取町では当初から子育て支援の一つとして三者が連携して行ってきた。「読書以前に親子のコミュニケーションが大切」との共通認識を持ち、絵本と一緒に、地域の子育て情報が掲載されているパンフレットなどをお渡しして、地域が連携して子育てを応援することを知ってもらう機会としている。

開始から6年が経過したが、アンケートなどの結果を見ても、ブックスタートが絵本を楽しむきっかけになったという保護者も多い。また、図書館では月3回、わらべうたを楽しむ乳幼児と保護者向けの講座を実施し、1歳7カ月児健診や3歳6か月児健診でも絵本の楽しさや図書館のPRを行っていることから、乳幼児の図書館利用が増えている。

(3) その他の行事

子どもが楽しく本にふれる機会を増やすために、夏休みには「クイズラリー」や人形劇などさまざまな行事を行っている。特に、子どもたちに自分の好きな本を絵で紹介してもらう「私の好きな本を紹介します」という取り組みは、毎年数百人の子どもたちが参加してくれ、児童室の壁一面に子どもたちの絵が並ぶ。自分の絵や友だちの絵を探しに来たり、一緒に展示している本を借りたりするなど、本を楽しむきっかけの一つとなっている。

3. 町内施設などとの連携

前述のとおり、図書館ではさまざまな取り組みを行っているが、子どもたちが多くの本と出会い、本を楽しむ機会を得られるようにするためには、図書館内での直接的なサービスだけで

は十分ではない。子どもたちが毎日通う保育所(園)や幼稚園、学校に、子どもの心を満たすような、また興味をかきたてるような本が豊富にあり、子どもの身近にいる大人が子どもと本をつなぐ働きかけができれば、子どもたちは日常的に本に親しむことができるのではないかと。そのためには、子どもと本にかかわる各施設などとの連携を深める必要があると考え、「熊取町子ども読書活動推進計画」の策定を契機に、体制作りを進めてきた。

読書は、子どもの身体の成長に直接的にはかかわらないため、二次的なものとして後回しになる場合もあるが、現在では、保育所(園)・幼稚園との就学前会議、小中学校との学齢期会議、また全体協議会を設置し、定期的な情報交換や研修機会の提供を行っている。少しずつ連携を積み重ねてきたことにより、町全体として、ともに子どもの読書環境を考える体制を整えることができた。計画策定から4年経た現在、これまでの取り組みを検証し、さらに内容の充実を目指す第二次計画の策定を進めているところである。

IV. 一般サービス

図書館には、土日祝日はもとより平日にも多くの利用者が訪れ、身近な憩いの場所となっている。一般室には約8万冊の本を開架し、分類順に並べるだけでなく、別置コーナーを設けるなど、探しやすい利用しやすい配架・展示の工夫を行ってきた。また、図書館が、必要な情報を入手できる生活に役立つ施設であり、多種多様な活動の拠点になり得ることをより多くの住民に知ってもらうため、2006(平成18)年度に「熊取町図書館計画」を策定した。この計画の中では、今後の図書館が地域や住民に貢献できることを目指し、「まちづくりの情報拠点になること」「住民との協働によるサービスを目指すこと」「住民の生活を応援すること」の3つを基本方針として掲げている。

しかしながら、未だ多くの住民にとって図書

館は、「本を貸し出す施設」であり、図書館の持つ多様な機能が十分に活用されているとは言いがたい。大人へのアピールは、子ども以上に難しい面もあるが、何かを知りたいと思ったときは「とりあえず図書館へ行こう」と思えるような図書館を目指し、日々努力しているところである。

1. 一般書の選書と配架、展示

選書については、現物見計らいの本以外は、各新聞の書評や出版情報などをこまめにチェックし、選定の参考にしている。予算の制約があり、数多く出版される本の中から購入する本を選ぶのは簡単ではないが、カウンターでの問い合わせや回転率などを考えながら、選書会議で議論しながら決定している。

配架は、児童書と同じく、表紙を見せる並べ方を各棚で取り入れている。また、新刊書に新聞の書評を挟み込んで配架したり、館内のあちこちに季節や時事を意識した特集コーナーを設け、細かく入れ替えを行うなど、さまざまな分野の本を展示するようにしている。

館内には壁一面の大きな展示スペースもあり、テーマを決めて書庫の本を活用しながら本を展示したり、町内で活躍する住民団体の活動紹介なども行ったりしている。

2. 情報拠点としての図書館

図書館が読書好きの一部の人だけのものではなく、「暮らしに役立つ」ことをアピールするために、「図書館計画」策定後の3年間に、住民にニーズの高い医療・健康情報を集めた「健康コーナー」、町の情報を集めた「くまとりコーナー」、府内のイベント情報や政府関係情報、新聞の求人広告まで集めた「情報コーナー」など、新しいコーナーの設置や既存コーナーのリニューアルを行ってきた。

「健康コーナー」(図4)は、闘病記や病気・介護・健康に関する本や雑誌を一カ所にまとめるとともに、関連する新聞記事や町内関係団体の取り組みなどを紹介する健康掲示板を設置している。来館すると、必ずこのコーナーを見る

という方もいて、好評である。



図4

「くまとりコーナー」は、図書館を訪れるだけで町内の情報がすべてわかり、住民が地域活動をする手助けにもなることを目指している。町が発行している各種計画、統計書、イベントちらし、議会議事録など行政情報の提供をはじめとして、町内の大学、小中学校の学校案内や資料、NPOや町内団体の発行物などを展示している。また、住民に「さくら」「だんじり」のテーマで毎年写真を公募しており、地域資料として、応募された写真を綴ったファイルなども置いている。

また、2008年度は町内にある二つの大学図書館と覚書を締結し、住民の大学図書館利用の利便性が広がった。

この他、町行政部局に対しては、図書館が仕事上で「役立つ」ことを知ってもらうため、各課の取り組みや計画の把握に努めた上で、行政向け新着図書リストを庁内LANで配信するなど、情報提供を行っている。

3. その他の取り組み

図書館でも、シニア世代の利用が増えてきた。大活字本や朗読CD、落語CDの購入を徐々に増やすなど資料面でも対応を行っている。また、対面朗読や宅配サービスを実施しており、定期的にPRを行っているが、利用はまだ多くない。図書館には100人収容できるホールがあることから、講演会やコンサートを開催しており、シニア世代の参加が多いが、特に童謡などを一緒

に歌う「シニアコンサート」は毎回盛況である。福祉施設にもコンサートの案内を行うなど、少しずつ取り組みを広げているところである。

一般サービスについては、住民との協働のあり方など課題はまだ残るが、利用者の声を励みに日々取り組んでいる。

V. おわりに

「司書は自分たちを追い込んでいる」と聞いたことがある。実際そうかもしれない。図書館や司書を取り巻く状況は、明るくはない。職員数も減り、やればやる程自分たちが忙しくなるとわかっていながら、町内すべての人の暮らしの中に図書館が根付いてほしいと考え、より良いサービスを提供したいと思っているのだから。

それはどうしてかと振り返ってみると、幾つかの理由が浮かぶ。自分自身が「本を愛している」こと、子どもたちに本を読み、読書体験を共有し楽しんだこと、寒い中や暑い中でも本を待ち望んでいる人がいたこと、求める本を探しあて手渡したときの喜び、それにより感謝の言

葉をかけてもらった経験、そしてやはり「図書館を愛している」こと、そんなさまざまなことが、自分自身の原動力となっているのだと思う。

最後に、いつも仕事への活力をくれる前川恒雄氏の言葉を借りたい。

「われわれの仕事は資料提供によって市民生活の役に立つことである。『図書館ができて本当に助かる』『市の仕事で一番良い仕事だと思う』『図書館のない町に住みたくない』と言ってくれる市民が大勢いる。これ以上われわれは一体何をほしがらるべきであろうか²⁾。」

実際にこういうことを言ってくれる利用者が、わが町にもいる。そのことを胸において、前進していきたいと思っている。

参考文献

- 1) 鬼頭 梓, 鬼頭梓の本をつくる会編. 建築家の自由: 鬼頭梓と図書館建築. 東京: 企業組合建築ジャーナル; 2008. p. 33.
- 2) 前川恒雄. 図書館の変革 (前川恒雄著作集 3). 東京: 出版ニュース; 1999. p. 91-2.